

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

カナンの女

――マルコ伝第7章24～30節――

1964年11月29日

小池辰雄

異邦の女 然り主よ おこぼれでもいいから キリストが負けた 女の一念 キリストの本願
煩悩は身に添える影 ひたむきの信 光となり水となる 恵みの力

【マルコ7・24～30】

24 イエス起ちて此処を去り、ツロの地方に往き、家に入りて人に知られじと
為給いたれど、隠るること能わざりき。25 ここに穢れし靈に憑かれたる稚な
き娘をもてる女、直ちにイエスの事をきき、来りて御足の許に平伏す。26 こ
の女はギリシア人にて、スロ・フェニキヤの生まれなり。その娘より悪鬼を
逐い出し給わんことを請う。27 イエス言い給う『まず子供に飽かしむべし、
子供のパンをとりて小狗に投げ与うるは善からず』28 女こたえて言う『然り
主よ、食卓の下的小狗も子供の食屑を食うなり』29 イエス言い給う『なんじ
此の言によりて「安んじ」往け、悪鬼は既に娘より出でたり』30 女、家に帰
りて見るに、子は寝台の上に臥し、悪鬼は既に出でたり。

●異邦の女

これはマタイ伝15章にもあります。マタイ伝の方が、イエスとカナンの女とのやりとりが
躍如と書いてあります。その点はマルコ伝の方が少しあっさりしています。ガリラヤ伝道
を一応終わりました――そのガリラヤ伝道がイエスにとって、成功であったとか、あるい
は不成功であったとか、いろいろ学者は言いますが――とにかく一応、異邦の西の方、大
体ガリラヤ湖から50キロ内外離れた所ですが、そちらの方のツロ・シドンへ行かれた。昔
の言葉でいうと「カナン人」の住んでいた所です。「カナン」という言い方はむしろ旧約的
な言い方です。マルコ伝には「ギリシア人」と書いてあるけれども、これはギリシア人と
いうことではなくて、ギリシア語を語るカナン人ということです。もちろん、ギリシア語
は当時の、英語みたいな世界語でしたので。新約聖書の書かれているギリシア語、コイネー・
ギリシア語です。

そちらの方に行かれたなら、異邦なんですから、異邦の女が来て、何かそこでお願いす
れば、キリストは「何だね？」ということ、素直に聞いてやってよかったと思うんですが、



ところが、以外にイエスはこの時にすぐ受けとられなかった。

「カナンの女、その辺^{ほとり}より出てきたり、叫びて『主よ、ダビデの子よ、我を憫^{あわれ}み給え、わが娘、悪鬼につかれて甚^{いた}く苦しむ』と言う。』（マタイ15・22）

「主よ、ダビデの子よ、我を憫み給え」というのは、例の盲のバルテマイが叫んだ時が同じ言葉です。非常に願いが切であるわけです。自分のかわいい娘が悪鬼に憑かれてしまつて、気がおかしくなつていゝという。どうにもならん。精神的に異常になるほど、人間というものは悲惨なことはいわけです。マグダラのマリヤも、そういった状態になつたことがあつたと思われませんが。「いたく苦しんでいる」という。マルコ伝の方では、「御足の許に平伏して」懇願している。そうしたら、イスラエルは即ち愛子^{まなご}であるが、異邦人は継子^{ままご}であるというような調子でもつて――継子どころでない――犬くらいに考えている。「犬」という言葉は、犬だとか豚だとかいうのは、ユダヤ人にとっては軽蔑的な言葉なんです。マタイ伝の山上の垂訓のところにも出てきます。

「聖なるものを犬に与うな。また真珠を豚の前に投ぐな」（マタイ7・6）

といったようなことで。しかし、犬というのは、我々にとっては「忠犬」と言われて、また別な角度からは、非常に「信実」（トロイエ）な動物としてかわいがられる。それは忠実な気持をもつていて、いろいろな意味において役にたつ。とにかく、ユダヤでは「犬」というのはそういうけなされた意味で、

「子供のパンをとりて子狗^{いぬ}に投げ与うるは善からず」

と。むげにキリストは否定されたわけなので、「まず子供にやつて、それから」というような気持でしょう。しかし、「それから」とまでは、それほどキリストはこの場合は考えておられなかったようです。

「我はイスラエルの家の失せたる羊のほか^{つかわ}に遣されず」（マタイ15・24）

と。何はさておき、失われたるイスラエル人に自分は遣わされていると。イエスという人はこの福音を万民に伝えるという、

「まだ我には牧^かうべき他の羊がある」

というようなことがヨハネ伝10章にも出ています。ヨハネ伝10章16節に、

「我には亦^{また}この檻^{おり}のものならぬ他の羊あり、

「この檻^{おり}のもの」というのは即ち、イスラエルの迷える羊、救いを要する人たちです。之をも導かざるを得ず、

例の「ざるを得ず」でありまして、どうしてもそういった者も導くのが自分の天命であるという。

彼らは我が声をきかん、遂に一つの群ひとりの牧者^{ひつじか}となるべし。17之によりて父は我を愛し給う、それは我ふたたび生命を得んために生命を捨つる故なり。』（ヨハネ10・16～17）



即ち、

「イスラエル人と異邦人、ユダヤ人とギリシア人の別ちなく」

とパウロが言っているが、その別ちなき世界、これを一つにしようということは、いうまでもなくキリストの本願であるはずです。ところが、こんなに密かにして、しかも異邦に来ていながら、それが現れないようにというのは、ちよつとこれは受けとれないキリストの行動でありまた言葉である。

●然り主よ

ところが、この女は、

28女こたえて言う『然り主よ、食卓の下の小狗も子供の食屑を食うなり』

と。このツロ・フェニキヤ、カナンの女というのは非常に魂のすじのいい女性です。

「ずいぶん酷いことをおっしゃる」

というようにことで、普通はこういうことを言われたら一種の侮辱ですからね、「犬だ」なんて言われたのだから、大体すぐ頭に來ちゃうわけです。ところが、これはちつとも頭に來ませんで、

「然り、主よ。そうでございます。おっしゃるとおりでございます」

と言つて、このキリストを肯定した。何か私たちが無理なことを言つて、向こうが反発しないで、「そうです」と言つと、自分が無理を言つたことが誠に悪かつたと思うものです。こういった素直な平伏しの魂は、これは本当に神に祝福される。

「食卓の下の小犬も子供の食屑を食べます」

と。新しい訳では、

「主よ、お言葉とおりです。でも、食卓の下にいる小犬も、子供たちのパンく

ずは、いただきます」

と。そこに「でも」とあるが、この「でも」という字はギリシア語の「デ」という字ではない。「でも」と言つて、何か反対のように書いてあるが、それは「カイ」というギリシア語で、「でも」でなくて、「しかも」ということで、「それに加えて」というような意味です。「そうです。しかも、こうでございます」と。

「そうです、それはそうに違いありません。ところでなお、食卓の下の小犬も

子供のパンくずを食べます。私たちが犬とおっしゃいましたが、小犬で結構

でございますが、しかし、こぼれたパンをいただきたいと思ひます」

と。非常にへりくだつた、そして、真つ直ぐにそれを受けながら、自分の願ひはこの言葉の中に実に切なるものがある。世の塵芥ちりあくたの如きものであつてよろしい。塵芥にも太陽の光があたりますと、光が貫いて、その塵がなにか金箔のごとくに光る。光を受けないものはうるわしくない。スライド・カラー写真は、こちら側から光を当てて映すから、非常に自



然の光が出てきて、普通にとった写真よりもきれいに映る。雲間から光が射してくると、紅葉しているもみじがその光を受けて、葉を見ていると同じ紅葉でもまるでよさが違ってくる。人間でも、要するに、光を受けないことにはどうにもならん。違いが非常にはつきりしている。そのような光の世界です。

●おこぼれでもいいから

「パンくずを食らう」と、切に願う。

「おこぼれでも何でもいいから、とにかく、あなたの御力が、恵みが欲しい」

と。ひたすら、キリストの恵みを、カリスそのものを願っているわけです。そうしたらば、この弟子たちは、マタイ伝を見ると、

「女を帰したまえ、我らの後より叫ぶなり」

と、「うるさくてしょうがない」というわけだね。「あんなのはもう帰してください」と、キリストの気持をまたもうひとつ上回ったようなことをこの弟子たちが言ったわけです。そして、このイエスが、

「我はイスラエルの家の失せたる羊のほかに遣されず」

なんて、断定的なことを言われた。イスラエルの失せたる羊のほかに遣されていないならば、なぜ、イエスはツロ・シドンまでいらつしやつたか、と言いたいくらいな矛盾したような事態です。イスラエルの失せたる羊を、異邦に散っている者をなお集めて来ようというお気持であつたかと思いますが。それはエゼキエル書34章を見ると、私はエゼキエル書にこんな言葉があつたかと驚いたんですが、11節に、

「主エホバかく言い給う、我みずからわが群を策して之を守らん。12牧者がその散りたる羊の中にある日にその群を守るとく我わが群を守り、之がその雲深き暗き日に散りたる諸の処よりこれを救いとるべし。」（エゼキエル34・11・12）

とある。そうすると、キリストが横つちよに行かれたのは、もうある意味において、ガラヤ地方の伝道が終わった――成功にしろ、不成功にしろ――それで、少し横の方へ行かれた。最後の、エルサレムに上る前に、なおしばらく西の方の海岸地帯へ行かれた。それは、エゼキエル書34章のそういったお気持であつたかと思えます。それだから、異邦へ行つても、イスラエルの家の失せたるものを見いだそうとするのであって、異邦の者を救おうというわけではない。

しかし、本質的にいえば、イエスの福音というものの本質からは、どう考えても、いくら鼻屑目にみても、キリストはちよつとこれはあまりに故里式で、狭隘なお気持ではなかつたかと言われても、ちよつとキリストもお困りになるかと思うような始末なんです。これを文字通り、額面通りこの記事を受けとりますとね。



「²⁵女きたり拝して言う『主よ、我を助けたまえ』」

異邦であろうと何でも、この私はどうにもならん。自分の娘がこのような精神状態で悪鬼に憑かれている。これは神さまのお喜びになる状態ではない。精神的にしろ、肉体的にしろ、人が病んでいる、苦しんでいる、悲しんでいるというのは、決してこれは神さまの国らしくない事態です。神の国らしくないものは、神さまは神の国らしくしたいわけです。今、全世界はいかに神の国らしくない全世界であるかというので、神さまの痛みとまたその救いの手は絶えず伸びてきているわけですよ。

「それには順序がある。もう少し待て」

というなら、まだ分かるけれども。「待て」でも何でもない。キリストは、これはどうもこの時、拒否された。

「²⁷女いう『然り、主よ、小狗も主人の食卓よりおつる食屑を食うなり』²⁸こ

こにイエス答えて言いたもう『おんなよ、汝の信仰は大なるかな、願いのご

とく汝になれ』（マタイ15・27、28）

と。マルコ伝では、

²⁹イエス言い給う『なんじ此の言によりて往け、

「お前の言う通りになる」というわけです。

悪鬼は既に娘より出でたり』

そこがイエスのイエスたるところです。「往け」と言ったら、もう遠隔にいらるところの娘は——ここにはいないんですからね——「往け」と言われて、もうその瞬間に娘はもう癒えた。悪鬼は既に出たと。まあ、なんと驚くべき人かと思えます。

●キリストが負けた

「汝の信仰は大なるかな」

と。なにもこのカナンの女は大言壮語したのでも何でもありません。

「小犬もパン屑をいただきます」

と、実に謙虚な心です。その謙った謙虚な心ですが、ところが、キリストは

「汝の信仰は大なるかな」

と言われた。正直、イエス・キリストは——私は他の福音書のところでこれだけはつきりとキリストが負けたことを知らない——キリストはこのカナンの女に正直、負けました。負けたですよ、これは本当に。水を割らないで、私たちはこの劇的な事態を見たいと思う。キリストはこのカナンの女の信仰に、この素直な一本すじの、ずいぶん無理を言われても、それで何か不服に思ったり、呟いたりせず、どこまでもキリストを信じ、キリストの恵みを——そこに今語られているキリストの言葉はどうも恵みらしくないけれども——その奥になおキリストの恵みを信じこんでいる。そして、何かいきりたつて、ものを言っている



のでもない。無理を言っているのでもない。

「どうか、くずで結構でございます」

と。そうしたらば、

「お前の信仰は本当に偉大な信仰だ。汝の信仰は大いなるかな」

と。この「求め」というものと、そして、求められている主体者。求められている主体はこのキリストです。キリストに対する彼女の信頼は100%である。何をおっしゃろうが、何をなさろうが、それを自分の頭や何かで判断しない。自分の側の、あるいは運命の、あるいはいろいろなことにも拘らず、一切に拘らず、どんなにそれが無慈悲のように見えようが――

「どうして、神さまはこうだろう。ずいぶん不公平ではないか。ずいぶん、矛盾だらけではないか。不合理ではないか」

と、思われることが人生ではいくらでも出てきます――にもかかわらず、一切にも拘らず、神は義である。神の意志は義しい。神の心は愛である。その神の義、神の愛を信じていく。いつかも申したと思いますが、藤井武先生が、大事な、伝道上大事な、もう本当に先生の半身となつてよく働いておられたあの奥さんを亡くされた。先生は神田に出かけて行って、伝道していた。そのときに、ほとんど一切のことを奥さんは引き受けてやっていた。そして、背中には園子ちゃんという赤ちゃんがいる。それはもちろん、奥さんにとつてはあまりに荷重です。ついに仆れた。エゼキエル書24章のところに、

「その妻を突然取り去るぞ」

という言葉がある。先生は、ちょうど伝道にかかっている真つ最中で、大事なときに、自分の手足であるところの奥さんを取られてしまった。もう、天地晦冥ですわ。

塚本先生の奥さんが地震で生命を奪われた。その時に塚本先生には、

「神は愛なり」

と響いてきたという。片一方は、

「神は義なり」

であり、藤井先生らしい。片一方は塚本先生らしいんです、「神は愛なり」と。先生方はその生涯を福音に捧げていったわけですね。

「無教会の信仰は観念だ」

なんて一面は、ある意味においては、私は時々言いますけれども、しかし、先生方自身私は決して非難しているのでも何でもない。先生方はみな、それぞれの体験を通して、その身を捧げて伝道された方です。

神さまが、キリストがどういうことをなさろうとも、自分がそのためにどんな運命に立ち到ろうとも、これを信じぬくということ。

「愛はおよそ信じぬく」



と、あのコリント前書13章にもある。信ずるということは、この「信じぬく」というようなことは、相手を本当に信頼するということには、相手に対する本当の愛があるわけです。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、神を愛せよ」

と、「尽くし、尽くし、尽くして、神を愛せよ」とキリストが言っておられる。もし、そのようなたちの愛、信愛というものがなければ、それは信仰ではない。また、本当にその人は生きているということにならない。私は永いこと、キリストのあの言葉が重荷であつた。そんなにとってもできないと思つた。この信の世界は、

「できる、できない」

という力みではない。やはり、燃えてやまざるもの、求めてやまざるものが発してくるんです。始めは、力みであつたつて、仕方がないですよ。信仰にはいろんな段階がありますから。いきなり

「一足飛びに行きなさい」

なんて言いません。けれども、「求めてやまざる」ということをやっているうちに、本当に求めているものが与えられて、それから今度は、「いよいよ求めてやまず」ということになるんです。その質の転換は、これは絶対に聖霊のバプテスマなんです。

こないだも、私は京都でよくみんなに言ってきました。絶対にこの聖霊のバプテスマを受けるまでは――それまでの信仰が偽りとは言わないけれども、質のよいこと筋のよいことは大事だけれども、聖霊のバプテスマを本当に受けるまでは――これはもう絶対不敗の勝利の信の世界、どんなことがあつても八方破れでも、絶対に負けないというところに来れないよと。今は、京都の群はまだ小さいけれども、これを本当に突破してもらわなくては、私があそこで語つたら、もううれしくてたまらなくて、

「本当に感謝です!」

と私に痛いほど握手した青年がある。話の中で何かその青年は突破した。奥田君から言つてきましたが、思いもよらない人がやってきて、昨日の講演会のことを非常に感謝していたというお手紙でした。私は、「講演会」なんて言つたつて、講演しているのではないんだから。あのYWCAの講演会でもそうです。

「講演なんて嫌いだ」

と私は言つたけれども、皆さんと一緒にその世界に入らなくては、すべて

「空の空なるかな」

です。

●女の一念

そういうわけで、素直ですが、本当に、このカナンの女は――旧約聖書も何も知らんけれども、このイエスという何か驚くべき人が現れた――これに対する全幅の信頼をもつて、



「こちらは犬であろうと、豚であろうと結構です。どうぞ、あなたの恵みにあずか
りたい」

という一念です。キリストという恵みにあずかりたいという、その一念。「女の一念」なん
ていう言葉があるけれども、これが正にそうなんだ。大体、女性の方が信仰が進むのは、
そういうことか何か知りませんけれどもね。男はすぐ理屈を言ったり抵抗したりするから、
深い強い進展がなかなかできない。

100%に受けた、その求めということです。

「求めよ、さらば与えられん」

というキリストの言葉は、

「ああ、あんな言葉は知っていらあ」

ではないですよ。福音の世界は、「知ってらあ」というものは一つもないんです、どんな当
たり前のことでも。

だから、キリスト教「常識」ではありません。『キリスト教常識』という雑誌を塚本先生
がお出しになって、同人に私もされたから、その時に、

「私は、先生、『常識』という題は賛成しません」

とはつきり言った。みんなは黙っていたけれども。どんなに

「神は愛なり」

ということがみんなにわかって——まだみんなはキリスト教の常識がないから常識を与
えようという、先生の気持はわかるけれども——「2+2=4」というようなことは数学
の世界では、

「わかっていらあ」

だっていいけれども、福音の世界では、「わかっていらあ」ということは一つもない。限り
なくその世界に入っていく。

「神は愛なり。神は義なり」

ということは、生涯を通してこれを学びとって決して尽きない。決して、常識になったら
ダメです。常に新たに驚かなくてはいかん。常に新たにその前に平伏さなくてはいかん。
驚嘆驚倒して進んでいくのでなければ福音の世界ではないということです。そこまではつ
きり、その時に先生に強くは申しませんでしたけれども、とにかく、そういう意味では私
はあまり賛成しない。ま、しかし、同人としていたしましたけれどもね。

●キリストの本願

こないだから、私は相当、「本願」ということを申しました。本願という言葉は好きだから。
弥陀の本願、キリストの本願。本願があるから、もちろん、私たちには救いがあるん
ですけど。しかし、本願があるからといって、こつちがのほほんでやっていたら、それは



ダメですよ。物理的なものではないんだから。やはり、こちらから烈しい棄身の、本願に對するにこちらは悲願靈願をもつてこれにぶつかって行く。

「十字架によって罪が贖われた」

という命題を、のほほんと信じてみたつて、それはおかしくなる。魂の世界はごまかしがきかないから。及第したつて、それは及第にならないんですよ。

「はい、信じております」

と言つたつて、ダメなんです。信じているという事態は、受けとつているという事態は、本当にその人の中でそれが化体かたいしている。化体するためには、本当に自分をいつも投げかけていなければ。投げかけている事態です。

「心を尽くし、思いを尽くし、精神を尽くし、力を尽くして」

というのは、一言で言えば、

「全身を投げかける」

ということ。全身を投げかける。

このカナンの女はそのようにして、

「我を憐れみたまえ。助け給え」

と言つて全身を投げかけて、

「豚であろうと、塵であろうと、犬であろうと、何でも結構でございます。私はただあなたの本当の恵みの力、あなたの生命、悪鬼を追いつくしてくださるこの事態、これを念願しております。まさか、娘が気が狂っているのは神さまのお心ではありませんか」

と。正直、キリストはこれを拒んでおられたのだからね。だから、キリストは一本参ったです。こんな信仰にでつくわすとは思わなかった。向こうはすぐ退陣するかと思つたら、退陣しない。だから、

「汝の信仰は大いなり」

と言われた。百卒長の場合には、

「では、私は行つてやろう」

と言われた。あの百卒長も異邦人だ。マタイ伝8章に出ている。その時には、「行つてやろう」と。そうしたら、

「いえ、いらつしやるに及びません。私の部下に、来たれと言えば来たり、為せと言えは為すというような、私と部下の間はそういう実に簡単な世界です。あなたが、『癒えよ』と御言を一言賜れば、それで治ります」

と。この百卒長の信仰がまた素晴らしいものだから、

「かくのごとき信仰はイスラエルでは見ない」

とキリストは言われた。



「反って、聖国の子らの信仰はダメで、異邦人の信仰の方がすごい」

という。私たちは元来、仏教的な世界に、また一般には非常に不信的な日本に生まれていますが。

「汝らの信仰が本当に使徒的な信仰だ」

と言って、天界のキリストから、私たちが驚かれて、

「汝らの信仰は大いなるかな」

と言われなければしょうがない。それは、生易しいことではダメですよ。創価学会が何万人の大集会をしようがしまいが、実質上、我々がこのツロ・シドンのカナンの女に負けなところの信を持たなければ。そして、これを受けとると、そういう世界に入る。

● 煩悩は身に添える影

そのようにして、キリストを受けとる信の事態は——こないだ、ちよつと京都でもお話をしたんですが——法然の言葉にこういうのがある。

「煩悩は身に添える影で、去らしめんとすれども去らず」

という。法然はそれで苦しんだ。何も法然にかぎらない。誰でもそうです。影を去らしめんとしても、私が立っていれば、そこに影が射す。それはどうにもならん。また、

「菩提は水に浮かべる月で、これを取らんとすれども取れない」

菩提というのは、悟りの境地に入った境地を菩提という。水に浮かんだ月の姿はきれいですね。だから、ちよつとこれを取りたくなる。猿が手をつないで、水の中の月影を取ろうとしているが取れない。取ろうとすると、ただ揺れて崩れてしまって、取れない。菩提の境地にどうしても入れない。煩悩を去ろうとしても、どうしても去れない。どうしたらいいかと。パウロがローマ書7章で、

「ああ、我、悩める人なるかな。この死の体より我を救はんものは誰ぞ」

と言った。みな同じ嘆きです。ルターが独房でぶっ倒れたのも、

「いかにして我は神の前に義たらんか」

と言って、苦しんでぶっ倒れてしまった。みなそうです。要するに、この影の元である自我という姿、この自我という罪の主体、これがどうにもならん。それで、キリストは十字架でこれを贖いとった。

「われ、キリストと共に十字架せられたり」

とパウロが言った。法然は、どうにもならんので、

「南無阿弥陀仏」

というこの称名です。弥陀の名を称えること、その他に一切の子細を知らずという。あの『一枚起請文』の中に出ている。観念の念でもない。何か取り沙汰するところの学者的な研究によるのでもない。ただ、「南無阿弥陀仏」と称名すれば必ず救わるべしと信じて疑



わざること、それだけだという。この

「必ず救わるべしと信じて疑わず」

ということは一体どこから生じてくるかといえ、これは親鸞の言葉にあるとおり、

「弥陀の本願を信受するに勝る善はない」

ということ。また、蓮如の言葉にも、

「信心とはまことの心とよむのである。行者の方より起こすがゆえに、わが心より起こることと思えども、

普通はそう思うけれども、本当の信心とは、

もと如来の御心より起こさしめたもうなり。もし、行者の心を言わば、偽り曲がりてかたましければ、まことの心とは申し難し。如来の直ぐなる御心なるによりまことの

心とは申すなり」

と。信心というのは、実は如来の心だという。キリストの信であると。それが本願的に来るまではダメだと。蓮如ももちろん浄土真宗の方ですが、法然にしろ、親鸞にしろ、蓮如にしろ、みな弥陀の本願を信じこんでいる。

●ひたむきの信

キリストが、必ず救ってくださるという本願の実体であるから、本願の効力を持つていらつしやるということをこのカナンの女は信じこんでいるから、

「こちらが豚でも何でも、犬でもよろしい。パン屑で結構でございます」

というのが本当にひたむきの信です。そのひたむきの信というひたむきの求めは、相手がこの凄惨なことを100%に、その運命環境如何にかかわらず、信じこんでいる。そこに本当の求めがくるわけです。他の状況を考えて、どうのこうのと判断していたらば、相手を信じぬくということはできない。

ずいぶん不合理なことを、キリストもひどいことをおっしゃった。そんな依怙鼻屑みたいなことをおっしゃった。けれども、

「それにもかかわらず」

と言って、このカナンの女は進んで言っているわけです。普通の判断からいえば、ちょっと困る、不公平に思われる。しかし、もう一つ奥を受けとっていく。ここですよね、問題は。我々の信とは、いろんな人生のことにでつくわしても、絶対無条件になおその奥に神の愛を、神の義を信じぬいていたら、必ずその人は勝つ。私たちがこのカナンの女の、この信の一念を本当にわがものとしていかなかったらダメです。

そして、食うところには実質が、御霊が入る。これが御霊のバプテスマです。福音の世界ではつきり、イエス・キリストは我々の自我をすつ飛ばして、その中に聖霊を与える。永遠の生命を与える。



「聖霊を与える」

とはつきりおっしゃっている。また

「それを本当に求めろ」

と。ペンテコステで弟子たちが全部ひっくり返って、ここに初めて本当の救いの歴史が始まった。ペンテコステを通らないキリスト教なんてものはありはしない。そういうペンテコステを私たち自身が、皆さん一人ひとりが、いつか「自分のペンテコステ」という日を持たなくてはいいかん。相変わらず、人間はそれでも躓いたり転んだりしますよ、人間というやつは。けれども、一遍そこを通っていくと今度は、そのペンテコステの質は、聖霊のバプテスマの質は、自分を投げだしていくたんびに、グングン深まって強くなっていく。そして、もはや確信ならざる本当の強さがその人に臨んでくる。

人間というものは生まれつき、いろいろ性質があったり、才能があったり、ダンテが言っている通りに、いろんなものですよ。しかし、そんな相対的なことを見ていて何になるか。問題はその奥に本当にその人が――人にどう思われたつていい――

「私はもうそこを通りました。だから、私は、相変わらずダメであっても、決してダメではありません。本当の展開をいたしております」

と、これがはつきりと言えるんです。これはキリストの本願の力、聖霊の力が私たちを推進させていくから。

●光となり水となる

煩惱は、自分ではどうしても、自我という影は、影たる煩惱は、一〇八の煩惱はどうにもならん。大晦日にいくら一〇八回鐘をついたつて、それはダメですよ。どうにもならん。しかし、どうにもならんところに、その中に聖霊という光の光体が入ってきた。

太陽に影があるか。太陽には影がない。この地球には影があります。地球それ自身は光体ではないから。本当は光体なんだよ、地球だって。中にももの凄い熱を持っている。だから、浅間山だって、静かにしているが、時々その驚くべき火を爆発させる。

私は火山が好きなんだ。死火山なんてのは好きではない。とにかく、煙を吐いているやつはいい(笑)。本当に自分のうちに火を持って、一朝事あらば爆発するような、そういうものです。爆発というのは神さまの力がですよ、怒がではない。

相対的には私たちは罪びとであるから影はあるけれども、影ありて影なしという世界です。即ち、光を持っているから太陽に影がないように、この信仰の現実においては影はありませんよ、私は。皆さんもそうです。影がない。何となれば、うちから光があるから、影はみんな消えてしまう。あの影はうそつぱちの影だということになる。本当は影はないんだと。既に救われている。

「全き」という完全性というものは、信仰の現実でキリストの御霊を受けたときから来て



いる。それが現実の全きになって、

「栄光より栄光に到りて、ついにキリストの姿に化する」

というのは、それはあっち側の話だ。あっち側の話だけれども必ずそうなると思し上げているとおりです。

「菩提は水に浮かべる月の如し、取ろうとしても取れない」

という。それはそうだよ。けれども、いいですか。氷は固い。パリサイ信仰は固い、冷たい、人を審く。下手すると、氷で手を切ったりする。けれども、キリストの聖霊の愛の光をもつて、この氷は融ける。我というこの氷の如きやつが融けてしまふ。融けたら、水です。自由自在、方円に従って丸くもなり四角ともなつて溢れていくところの、泉水の如き水である。水というのは、断層に來れば、滝となつてたぎり落ちる。木の葉の下は、サラサラと静かに囁く^{ささやく}ようにして流れる。湖となつては深い神秘的な沈黙になる。やがて大海となつて、塩をもつて一切のものを浄化するような驚くべきことになる。

自分がこの水になったら、取るも取らないもない。月影を宿してしまふ。自分が水となつたら、この月影を宿して、

「はい、私の中にきれいな月がありますよ」

と。これですよ。御霊の信仰の現実とは、月影を宿し、影のないという、これが聖霊の突破をしたところのクリスチャンの本当の姿である。そうでなくて、こっち側からただ、

「十字架の贖いを信じています」

なんて、いくら力んだつて、それはダメですよ。キリスト教に力がないと言うならば、そのような現実^{じじつ}に質的にとにかく入っていないからです。入っていれば、創価学会がどんなに盛んにみえても、どっこいと。こちらは一人でこれに對することが出来る。皆さんは、それだけの驚くべきイエス・キリストのものである。

「われ、キリストのうちに。キリストわがうちに」

と言う、パウロさんを見てください。皆さんがみんな、パウロさん、ヨハネさん、ペテロさんになれる。

●恵みの力

そういう事態がこのカナンの女の一念の受けとりでありました。その一念の受けとりがキリストを驚かして、

「参つた！ お前の信仰は大いなるかな。そうだ」

というわけだ、キリストは本当は。その心だけで、もう治っている。そこがイエスです。

「もう、治っているよ」

と。というのは、イエスがこれを100%に受けられた。そのキリストの驚くべき恵みの力が直ちに作用する。そして、もう悪鬼なんかどこかへ行つてしまっている。



イエス・キリストの信は絶大なるかな。なんと驚くべき信そのものの人であろう。なんと驚くべき愛そのものの人であろう。福音書のこのキリストにでつくわして、私たちが本当にこの文字の中に平伏し、全身を投じて、一時間でも二時間でもその中に祈りこむようなことになっていけば、皆さんは本当に凄くなる。ある時は滝浴びをしたっていいですよ、私たちもやりました。けれども、静かな毎日の中に深いもの、凄い底力の世界に入れますから、決してただ現象ではない。

その何でもない、

「どうぞ、パン屑で結構でございます」

という、この心の中に驚くべき力が宿ってくる。どうですか、皆さん。そういうカナンの女のこの話は、マルチン・ルターが大好きだった。あの湖を渡っていくキリストにペテロが水の上を歩いた話が、ゲートルは非常に好きだったというけれども。とにかく、この信でもって進んで行く。

そして、法然がついに、

「南無阿弥陀仏」

になったけれども、その「南無阿弥陀仏」において、法然には全く如来がやってきますから、法然が深く祈っていれば、法然の身边に光が射していたと書いてある。坊さんたちは、みなその世界に入っているんです。

こないだ、私は京都の講演会でお話したときに、

「仏道を修めた偉大な僧侶はみなこの比叡山に来たではないか。あなた方はこの比叡山の麓にあつて、信仰があの方先達たちをもう一つ上回るような、質的に本当に上回るような――この福音はそれを上回っている世界なんだから――そこに入らないでどうするか」

と絶叫したわけです。

どうか、皆さん、そういうことで、いよいよ、

「この福音のためには」

と言つて――もう今、四十七士（テレビで放映の赤穂浪士）の討ち入りのところに来てしまつたね――あのような、みな死を覚悟しての業ですよ。私はあれをじつと見ていて、本当にもう何とも言えないです。クリスチャンというものは、イエス・キリストに身を献げた者として、あの四十七士以上の、しかも私たちの中にはキリストの生命が来て、死んでも死なないところのものがある。それをもつて証しないのだったなら、もう聖書はやめた方がいい。どうか、そういう気合で行く人だけと、私は来年から行きますからね。どうか、そのつもりでひとつお願いします。では、今日はそこまで

